

根本からみなおさなくてはならないのではないか。

3 比喩の問題 森さんは教父における比喩的解釈と字義的解釈の歴史を懇切にふりかえり、アウグスティヌスとそのいずれにも片寄らず、コンテクストにてらしあわせて解釈する方向にある、といわれた。(提題2要旨, 16頁) もとよりこれに異論はない。しかし子細にみると、アウグスティヌス自身の解釈の姿勢において、けっこうばらつきがあるのではないか。創世記をめぐる四つの注釈において、筆者には森さんが急ぎ足で横目にみて通りすぎた『コントラ・マニケオス』や『告白』末尾の創世記解釈のほうが面白いのだが、さらに行為の問題をあつかう『霊と文字』(412—3年)の《字義的な(=霊的)解釈》もじつに魅力的である。さて森さんへの質問は、それではアウグスティヌスにおいて、シグヌムの世界とその解釈がすべてであるのか、シグヌムの世界を超える直観についてはアウグスティヌスはどのような態度をとるのか、である。これはおそらくこれまで中世哲学会が三年にわたって共同で追跡してきた「哲学と神秘」の問題にもふれる問題でもあるが。

意見

水落 健治

Wolfgang Kluxen 教授の提題は、13世紀スコラ学における創世記解釈をめぐる行なわれた。

教授は、まずトマスの創世記解釈の特徴が、創造物語の「解釈」によりも、むしろ、そこにおいて展開された「神と世界と両者の関係についての概念」に在ることを示し、次いで、この「概念」Begriff が教父以来の創世記解釈の努力の結果生み出されたものであり、それが教会の伝統の中で受け継がれて来ていること、したがって、「世界に始めがある」等の命題は信仰箇条であるから、これを直ちにアリストテレスの自然学等と直結・対峙させるべきではないこと、また、聖書解釈に多義性が許される限り、人は学問的に受容可能な聖書解釈を求めなければならないことを示された。

そして教授は、トマスのこの「概念」の伝統が、ゲントのハインリッヒ、ボナヴェントゥラにおいてどのように受容・展開されたかを明らかにし、この伝統が、エック

ハルトに至ると「思弁的に展開され」*spekulativ fortschreiten*, 「創世記のテキストに含まれる形而上学」*die Metaphysik, die er (=Eckhart) darin enthalten findet* を探り出そうとする彼の解釈方法に至ったことを歴史的に素述されたわけである。

Kluxen 教授のこの記述は、盛期スコラ期における聖書解釈と信仰箇条とがお互いどのような関係にあったかを知る上で大変興味深い。教父たちの創世記解釈の努力が、信仰箇条において表現される「概念」の形に結実し、それが教会の伝統の中で、聖書解釈を方向づけ、いわば「規制」して行くという事態が、教授の提題によって浮き彫りにされたからである。また、「トマスや、エックハルトにおいて顕在化した概念 *Begriff* の伝統が、ヘーゲル等のドイツ観念論につながるのだ」という教授の指摘も、西欧の哲学史を理解する上できわめて示唆に富んだものであった。

けれども、聖書（特に、『創世記』）の解釈の可能性をこのような「伝統的・教会的方法」のみに求めることは、『創世記』という文書のもつ豊かな解釈の可能性をひとつの方向に矮小化して行くことのように思われる。元来、『創世記』は、長い伝承過程の中で成立した様々な神話を背後にもつものであり、したがって、そこには様々な豊かな解釈の可能性が存していたはずである。そして教父たちが、『創世記』冒頭を解釈するに際して「多義性」を認めた背後には、彼らが、たとえ自覚してはいなかったにせよ、『創世記』という書物のもつ豊かな解釈可能性を直観的に知っていた、という事態が存するよう思われるのである。

確かに教父たちは、みずからの聖書解釈の結果を「概念」によって表現はした。だが、その「概念」が「信仰箇条」となって聖書解釈を「方向づけて」行くとき、新たな解釈の可能性は閉ざされて行くのではあるまいか。Kluxen 教授が提題で指摘されたトマスの「自由な」解釈の方法——聖書のテキストが開かれている *offen* 限りで、解釈者は自然学の成果と矛盾しない世界像を創世記から引き出す必要がある——も、私には、何か「限られた土俵の中での自由」にしか思えないのである。そのような解釈方法は、「聖書から引き出された概念」と「自然学から引き出された概念」とを、解釈者の中で——聖書をダシにして——操作する以外の何者でもない、と言ったら、それは言いすぎであろうか。

私が、このような思いを持つのは、おそらく私が日本人であり、「概念」*Begriff* や「観想」*Spekulation* に対して西欧の人々とは異なった感覚を持っているからであろう。「世界の根底には（神の）イデー *Idee* が在り、聖書解釈はそのイデーを引き

出して来るものである」というような聖書解釈観（私には、Kluxen 教授がこのような前提に立っておられるような気がしてならないのだが）、ドイツ観念論につながるような聖書解釈理解は、私にはどうしても馴染めない。むしろ私は、観念論によって矯小化されたものとは異なった方向にこれからの聖書解釈・創世記解釈の可能性を求めたい。ヨーロッパ人ではない我々が、これからの聖書解釈にもし寄与する所があるするなら、それは正に、この「概念に対する感覚の違い」にあるような気がしてならないのである。

意見

天地創造の光と影

山 本 巍

『創世記』をめぐるシンポジウムでの質問は、創造は神の完全性の一部であるか、ということであったので、それに関連したことを記して補足しておきたい。

「初めに神は天と地を創造した」の「初め」は文字通りであって、その「前」のない「初め」である。つまりは過去のことでない。過去の時ならば、いつであれその「前」がまだあるからである。従って「初め」は無限に昔の過去ですらない。こうして「初め」はズラーと引き伸ばされた時間軸上のいかなる過去でもない。とすれば、「初め」は「今、ここ」ということではないか（「神代在今、莫謂往昔」）。創造の朝の曙光が「今、ここ」にあるということではないか。しかしそれは無条件の真実ではない。天地はあれども、「天地あれ」という創造の言葉は聞こえていないからである。もし「初め」が「今、ここ」であるなら、天地万物創造の秘密が、「今、ここ」に髪の毛一筋の曖昧もなく露に現れ見えていなければならない。しかしそうになっているだろうか。聖書は天地創造の直後、「善し（美しく）」と神が祝福したと伝えている。そうであれば、人間も天地も原初から救われているはずである。全ては明るく透明になっているはずである。しかし天地は自然と人工の暴力に蹂躪され、無数の人が祈りも願ひも空しく無惨に倒されている事実は覆いがたい。世界の現実はいくらかの幸運と多量の不運と悪と悲惨に包まれているのである（エンペドクレスの「憎」を思い起こす）。創造は神の完全性の一部であるか、という問いが生まれる所以である。それと